

フオイエルバッハの会通信 第93号

【シリーズ・復刻】

出 隆「哲学はないか——わたくしの彷徨」、『變革の哲學へ』（彰考書院 1949年）所収

ルートウィヒ・フオイエルバッハの句に、"Keine Philosophie - meine Philosophie."というのがある。——これはどういう哲学であろうか？

それから約百年ののち、日本の或る古い都でのことである。まだドイツ語をならいたての「哲学青年たち」——といつても必ずしも年が若いとは限らないところの「哲学の Junger たち」——数名が、文法書を持ちだし、辞書をくりながら、あたかもかつてゲーテのファウスト博士が、ヨハネ伝の初めの『はじめにロゴスありき』のロゴスをドイツ語に訳すのに苦心したときのような悲痛な気持ちでもあろうか、苦心苦吟して和訳している。

辞書でみると、'keine'は「なにも……ない」であり「ひとつも無い」である。そして、'meine'は動詞'meinen'「考える」「思う」の変化形であろう。というので、徒弟のひとりが『なにもない哲学——我思う、哲学を』と訳したが、これではわけがわからない。これはおかしい。そこへ、もひとりが'meine'は所有代名詞「私の」ではないかと言いだして、一同苦心のすえ——

『なんでもない哲学——これが私の哲学』ということになった。だが、「哲学」の使徒たるかれらであつてみると、哲学にこういうことの言われようはずがない。「君の哲学はなんでもない」など言われたのでは許しておけない。すると、そこに観想派の青年が、——さつきから辞書を見ていたが、そのとき口を出して、——'keine'は「なんでもない」ではなくて、「なにも……しない」の意だと思ふ、と言いながら、

『なにもしない哲学、無為観照の哲学——これが私の哲学である。』と訳し、そして、「そうだ、無為の哲学、テオーリアの哲学、これが僕のだ、」と得意げに言った。

「いや」と、いまひとりのしんこくな顔をしたのが「keine は、やはり、なにも無いのだ、絶対の無だよ、」と言つて、こう訳した。——

『無の哲学、これが私の哲学だ。』——そしてさらに、「行為と無為との絶対無における矛盾的自己同一の哲学、これが私の本当の哲学だよ、」と説明した。

そのとき、わきでこつこつと文法書を調べていた第三の青年が、「どうもこの keine は両方の Philosophie を否定するらしいよ、」と言いだしたので、第四の気の早い豪傑風なのが、得たりとばかりに、「だからさ、『いかなる哲学も私の哲学ではない』というのだろう、つまり哲学は私すべきでなく、私の無い哲学、無私の哲学、滅私の哲学、ただこれのみが本当の哲学だ、というんだ。そうだよ。」と叫んだ。

まてまて、それは逆じゃないかしら、——と、第三のがさえぎつて、「いいかい、これは直訳すると、君のいう通り『いかなる哲学も私の哲学ではない』というのだが、そのわけは、直訳すると、君のいう通り『いかなる哲学も私の哲学ではない』というのだが、そのわけは、『他のいかなる哲学も、私ではない』というので、つまり、本当の哲学は『私の哲学』あるのみだというので、……要するに、『私の哲学』『自我の哲学』『主体の哲学』

のみが私の本当の哲学だというので、これを言い換えると、つまり、実存だよ、『実存の哲学』のみが真の哲学だというのだよ。」と言った。……

これは一つの譬え話であるが、しかし実際に、とかく「哲学」という名の或る高尚で深遠な思想の殿堂に参詣し帰依することのすきなああした哲学青年は、あの一句四字からでもあのように、観想無為の理論や、真空妙有な無の絶対弁証法や、滅私奉公八紘一字の哲理や、さては悩ましい実存の哲学まで、ひねり出しかねないのである。かれらの頭脳——その辞書や文法書——にかかると、同じフョイエルバッハの警句"Mann ist, was er isst."（人はその食^{イースト}るところのもので^{イースト}）からでも、どのように高尚深遠な人間哲学がしぼり出され喰い物にされることだか、知れたものではない。

たしかにこのような哲学も、まったくないとは言えない。それは、かつて誰れかの頭のなかにあつたし、いまでも多くの哲学青年や哲学専門家の心のなかにあると言われよう。しかし、「そのような哲学なんてありやしない、そのような哲学はなくてもよいし、ない方がましだ、」とも考えられよう。そう言えば、かれらは、あるというにも色々の意味があるなどと、さらに思弁をはじめでもあろうが、とにかくフョイエルバッハはこのように、そのような哲学はありつこない」と考えて、そのよおうな「哲学はない、——というのが僕の考えだ、僕の哲学だ、」と逆説的に言ったのであろう。

わたくしは、近頃になつて、この逆説が、ひとごとでなく、自分の哲学(?)について言われているような気がし、それまでこの哲学でなんという長い道草を喰つて来たものだろうと、しみじみなさけない思いをしている。——一体、哲学はあるのか、なくてよいものなのか、或いはなくてはならないような哲学があるのであろうか。わたくしの喰つて来た道草を思いだしながら、このことを考えてみよう。〔以下略〕

【シリーズ・復刻】

アンリ・ルフェーヴル「疎外概念」(『思想』No. 526、1968年4月)の抄録

マルクスの思想を正しく理解するためには、媒介者の役目を果たしたフョイエルバッハの著作と思想を思い出さねばなりません。マルクスは、フョイエルバッハとヘーゲルを妥協させたのではなく、対決させたのです。マルクスは、ヘーゲルに対してフョイエルバッハを利用し、また、フョイエルバッハに対してヘーゲルを利用したのです。フョイエルバッハにとっては、人間のみが全体的であります。人間は、部分がそのうちでは相互に外在的な、散乱した自然から出現します。人間はこのような自然から現出しながら、しかも、全体性であります。どうしてそうなのでしょう。それは、人間が感性的存在 (*être sensible*) であるからであります。フョイエルバッハには、他の言語においてよりもドイツ語において一層明瞭な、著しい言葉の洒落が、明らかに見られます。もともと、フランス語には「ル・サンス」(*le sens*) (感覚) (ドイツ語では *Sinn, sinnlich*) というこの特殊な用語を解釈することができる、豊かな語彙があります。「ル・サンス」とは、聴覚、触覚、視覚等の感覚の器官であります。定冠詞複数形つきの「レ・サンス」(*les sens*) とは、この感官の総体です。かくて、「サンス」は指向 (*orientatiopn*)、方向 (*direction*) であり、また同様に、意味 (*signification*) であります。この用語のこの三つの意味 (感官、指向、および意味) は、フョイエルバッハにおいては、一つの全体を構成する、極めて強力な統一をなしています。

人間は、感官を持ち、自己の活動に指向、方向を与え、最後に、自己の行為が意味を有する存在です。しかし、人間存在は自己の「サンス」を、その用語の三重の意味において、見失います。人間は、抽象作用によって、自己の感性的活動を見失い、自己自身のうちに持っている指向を見失い、自己の行為の意味を見失い、かつ誤ります。人間は「サンス」を見失うのです。そして、これが疎外であります。人間は自己自身の現実性を自己自身の外部に投影します。神とかヘーゲルの「理念」とかは、存在論、つまりあらゆるものの始源、ではなく、反対に、迷妄であります。人間は自己の「サンス」を見失ったのであります。その時、人間は何ら感性的なものを持たない超越者の存在を信じるのです。人間は抽象物を対象化するのです。そして、これがあらゆる神学の始源であります。その時、人間の本質は誤られることとなります。この具体的な人間の本質は全く身近かなものであり、感性的なものなのであります。フョイエルバッハの存在論は、彼にとって、ヒューマニズムを基礎づけるものです。マルクスは、フョイエルバッハから、転倒した世界、つまり、「サンス」が誤られ、「ノン・サンス」(non-sens) (ナンセンス) に変った世界のイメージ、あるいは感念を受け取るのです。「サンス」は、上述のごとく、指向、すなわち可能性と考えられるゆえ、見失われたのは、開花と充全性との可能性であります。この可能性が見失われたのは、与えられた本質、過去の本質、始源の本質といったものではなく、潜在的本質、つまり充分に実現されるべきであった本質を誤ることによってであります。理論的かつ実践的の革命によって立て直すべき転倒した世界というこの考え方、この観念、マルクスはそれをヘーゲルに、ヘーゲルの弁証法的方法に適用するのであります。マルクスは、フョイエルバッハから、転倒した世界の転倒によって実現すべき人間の理念、つまり、人間的現実とは全く身近かなものであり、感性的なものであるが、しかし、同時に見失われている、という人間の理念を、保持するのであります。以上のように、マルクスは理論的かつ実践的の革命を規定しているのであります。

もっとも、マルクスは、ある時期の間、転倒した世界の転倒はただ一つの行為である、という錯覚をしていました。革命的思想家が遂行する理論的行為、労働者階級が歴史のある決定的な瞬間に遂行しようとしている実践的行為、これらの行為の全体的革命は種々の疎外を同時に終らせるであろうという訳です。後になって、この革命の観念は多様化され、分析され、そして継起的な革命の歩みとして時のうちに割り当てられるようになります。すなわち、宗教的疎外の終り、政治的疎外の終り、経済的疎外の終り、イデオロギー的、あるいは哲学的疎外の終りとしてであります。しかし、マルクスは、まだ哲学の影響下にあり、まだ哲学と自己自身の思想との中間段階にあったある時期の間は、疎外の終りを歴史的飛躍、つまり盲目的必然性の意識的自由への跳躍、の結果として考えていたのであります。

ヘーゲル主義に対して、マルクスにとっては、疎外は相対的であります。それは絶対的なものではありません。マルクスは、かの疎外の存在論、つまり、ヘーゲルの理念は自己を外化し、そして自己を疎外することによって世界を創造する、という疎外の存在論を放棄します。疎外は歴史のうちに生じるのであり、歴史から生じるのであり、これこれの領域に特有のものであります。すなわち、絶対的疎外があるのではなく、種々の疎外があるのです。例えば、政治的疎外は、官僚主義的機構としての、強制力としての国家に特有のものであります。あるいはさらに、哲学的疎外を含めてイデオロギー的疎外は、次の仕

方に、すなわち、人間存在が自己自身の外に自己を求め、自己を見ようとし、自己自身が創造した外的な力に悩まされる自己を感じる仕方に特有のものであります。それゆえ、疎外は歴史的であり、誤られた過去や見失われた力によってではなく、止揚によって、なおそれ以上に、止揚の可能性によって規定されるのであります。

マルクスにおける疎外とは、本質的に、生成が停止されることであり、可能的なものが妨げられることであります。人間存在の方向、あるいは方向に沿った発展が可能であるのに、制度が、この発展に対立する条件によって、この発展を不可能にするのです。これが至高の疎外、可能的なものの停止です。疎外は矛盾によって産み出されるのです。矛盾は、ヘーゲルにおいてのように、疎外によって産み出されるものではありません。マルクスにとっては事情は逆であります。

もう一度述べますと、ヘーゲルは転倒した世界、立てなおすことが問題である世界に属しています。矛盾は、自然との関係における社会の発展の根拠であり、また自己自身との関係における人間存在の発展の根拠であります。しかし同時に、人間存在を、創造に、新しいものの発明に駆り立てるこの矛盾的関係は、閉され停止しうるのであります。その時、勝利を占めるのは反革命であり、反動であり、静止的なものです。至高の疎外です！

〔1968年1月20日大阪朝日ビル・ホールで行われた講演の草稿。大野桂一郎訳〕

*本紙は「復刻」のための季刊紙ではありません（笑）。「復刻シリーズ」はあくまでも穴埋めです。毎号、穴埋めが主では悲しいので、ぜひみなさまからのご投稿をお待ちします。（編者）

研究交流の会「疎外論再考」開催のお知らせ

先般池田成一氏により提起された「疎外論復権」を受けて、現在名古屋哲学研究会機関誌『哲学と現代』で疎外論を展開している津田雅夫氏に、「疎外論再考」と題して話題提供をしていただきます。久しぶりの交流会開催です。みなさまぜひご参加下さい。

2015年3月7日（土）13:00-17:00

東洋大学白山校舎5号館3階5301教室

（5号館は正門から緩い坂を上って正面のホールの奥）

都営地下鉄三田線「白山」駅

A3出口から「正門・南門」徒歩5分

A1出口から「西門」徒歩5分

東京メトロ南北線「本駒込」駅

1番出口から「正門・南門」徒歩5分

JR山手線「巣鴨」駅

南口から「正門・西門」徒歩20分

都営バス10分（「浅草寿町」行「東洋大学前」下車）



〈ニュース〉

(1) 書誌情報

柴田隆行「フョイエルバッハの実践 (2) 不死信仰の秘密を暴く」2014.11、『季報唯物論研究』No. 129、pp.110-117

石塚正英「身体論を軸としたフョイエルバッハ思想」『石塚正英著作選』第3巻、社会評論社 2014 (初出は『情況』第3期第3巻第8/9合併号) [本論文だけではなく他の収録論文もいけばフョイエルバッハの精神に基づいて書かれていると読む事ができる。編者注]

(2) ニュルンベルク・ルートヴィヒ・フョイエルバッハ協会定例ゼミナール

ニュルンベルクのフョイエルバッハ協会主催のゼミが今年(2014年)も10月25日に開催された。同協会HPより、Helmut Walther氏による報告の概要をかなり大雑把に紹介する。

すでに7回目となる恒例のこのゼミは、ドイツ全土ないしオーストリアから報告者ならびに参加者を得て開かれた。参加者は約30名である。

最初の報告はマールブルクのDr. Dr. Joachim Kahl氏によるもので、ピエール・ベイルに至るフョイエルバッハの哲学史著作の続篇としてフランスのモラリストを取り上げる。Moralistik「道徳性」という定義はすでにフョイエルバッハの断片集に示されているが、その要請が、一方で賢明な社会態度と純化された生活様式として、他方で個人の(あらゆる行為の真の動機である)エゴイズムと自己教育の受容を特徴づけている。カール氏の講演は、モラリストとしてとくに重要なラ・ロシュフコー、モンテスキュー、シャンフォールに絞られ、彼らのエッセーないし箴言が、旧体制社会を反映しているだけではなく、「曝露心理学」によって社会の背後を見ようとしたという点が明らかにされる。ドイツでは道徳性はリヒテンベルク、ショーペンハウアー、ニーチェによって継承され、フョイエルバッハも宗教批判で心理学的方法を用い、自己疎外的神像の背後にある人間の願望や突出した自我を明らかにした。フョイエルバッハは、モラリスト同様に、「社会的エゴイズム」を自らの道徳哲学の基礎としたのである。

ボンのDieter Hanz氏は「パウル・ヨハン・アンゼルク・フォン・フョイエルバッハの刑法上の取得財産」と題し、多くの天才的子孫を残した「フョイエルバッハ家」の父を取り上げる。父アンゼルクはカント哲学を学んだのち法学部に移り、早くから著述活動を始めた。26歳で『ドイツで一般に通用する刑法の教本』を公刊。彼は法と道徳を厳密に区別し、刑法の目的は報復でも贖罪でもなく抑止にすぎないとする。等々。

昼食後、フライブルクのMatthias Christian Friedel氏が「キリスト教の非本質。フョイエルバッハ哲学から見た悪魔」と題して発表。文献上めったに見ないAdiabolismusという概念を解明。これはごく単純に言えばAtheismusという概念とパラレルだという。後者は神概念の否定を表すが、前者は悪魔信仰の否定である。フョイエルバッハ自身は悪魔という主題を明示的ないし体系的に論じていないが、彼の著作の諸段階、とくに『神統記』でAdiabolismusという表現を使っている。[電子データ検索によると、Adiabolismusという言葉が出てくるのは、シュッフェンハウアー版全集第4巻Pierre Bayleに付されたAnmerkungen und Erläuterungenの(21)の脚註S.309. Fn.1の1箇所のみである。そこにこうある。Die Geschichte des Diabolismus ist das Pronostikon der

Geschichte des Theismus. ... Wie man jetzt den Atheismus als Feuerbachianismus, so signalisierte man einst den Adiabolismus als Bekkerianismus. 編者註] これに対してフョイエルバッハは積極的な人間像を対置する。悪魔信仰の原因は、恐怖、悪魔の烙印、呪い、罪の肩代わり、憎しみ、自己嫌悪であり、悪魔は神の相手役である。等々。

コーヒーとケーキの招待を受けたあと参加者は、ラインバッハの Silivana Stubig 氏による画像と動画を使った講演で心身共に強化された。Konrad Deubler (1814-1884)が1867年に友人フョイエルバッハを Bad Goisern に訪ねたのは、フョイエルバッハが軽い脳卒中から回復したところだったとして、この農民哲学者の事績が紹介された。

最後はザルツブルクの Prof. Dr. Peter Dinzelbacher 氏が、フョイエルバッハによる不死幻想の否定について論じ、フョイエルバッハが「別の人生があるとしたら、この人生は何のためか」と問うたことの意義を明らかにする。この問いはすでにエピクロスに遡り、マルクスの学位論文に至る。報告の第二章でこの経過が歴史的に検討され、フランス革命でのロベスピエールによる大量殺戮が目ざしたのは、「理性的最高存在」の崇拝だけでなく、魂の不死であったことが問われる。

事務局から

- * 本紙は季刊発行です。次号は3月発行予定です。ぜひ情報やお便りなどをお寄せ下さい。
- * 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フョイエルバッハの会」。
- * 本紙は、発行後約2週間後に下記ホームページにて pdf 版で公開します。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

tamast@toyo.jp

フョイエルバッハの会

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>